



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	Factors Influencing Tourists' Overall Re-Participation Intention in Wellness Tourism and Their Loyalty to a Specific Destination [an abstract of dissertation and a summary of dissertation review]
Author(s)	李, 嬌; Li, Jiao
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(観光学)
Dissertation Number	甲第16325号
Issue Date	2025-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/95259
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	LI_Jiao_review.pdf, 審査の要旨



学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（観光学）

氏名：李 嬌

審査委員	主査 教授	辻本 篤
	副査 講師	オン・イーシュエン
	副査 准教授	張 堯赫

学位論文題名

**Factors Influencing Tourists' Overall Re-Participation Intention
in Wellness Tourism and Their Loyalty to a Specific Destination**
(観光客のウェルネス・ツーリズムへの再参加意図と
特定の目的地へのロイヤリティに影響する要因)

本研究は、ウェルネス・ツーリズムにおける観光客の再参加意図および特定目的地へのロイヤリティ形成に影響を与える要因を体系的に解明することを目的としている。近年、ウェルネス・ツーリズム市場は世界的に急速な成長を遂げており、観光産業の中でも重要な位置を占めつつある。しかし、観光客の行動意図や意思決定プロセスに関する理解は依然として不十分であり、特に健康意識や健康状態が観光客の行動に与える影響や、情報品質および目的地イメージがロイヤリティ形成に果たす役割についての実証的研究は限られている。本研究では、これらの課題に対処するために、次の2つの研究を実施している。

まず、第一の研究では、観光客の健康意識と健康状態を基に市場をセグメント化し、各セグメントがどのように再参加意図を形成するかを検討した。具体的には、知覚価値と知覚リスク理論を基にしたモデルを構築し、観光客の価値認知（機能的、社会的、感情的、認知的）とリスク認知（時間的、財務的）が態度および再参加意図に及ぼす影響を分析した。その結果、健康意識が高い群では機能的価値や感情的価値の影響が強く現れる一方で、健康意識が低い群ではリスク認知の影響が顕著であることが示された。また、クラスター分析により、「健康意識が高いが不健康」、「健康意識が低く不健康」、「健康意識が高く健康」という3つのグループが特定され、それぞれ異なる再参加意図の形成プロセスが観察された。

次に、第二の研究では、刺激-有機体-反応（SOR）理論を基に、ソーシャルメディア上の情報品質が目的地イメージおよび観光客ロイヤリティに与える影響を検討した。情報品質は内的品質、文脈的品質、表現的品質の3つの次元で評価され、これらが認知的および感情的イメージを媒介して満足度とロイヤリティに与えるメカニズムが明らかにされた。さらに、中高年層と高齢層の間で、情報品質の評価や意思決定プロセスにおける顕著な違いが認められ、高齢層は感情的イメージの影響を強く受ける傾向がある一方で、中高年層は認知的イメージを重視する傾向が確認された。

本研究の学術的貢献としては、ウェルネス・ツーリズムにおける観光客行動の再参加意図およびロイヤリティ形成に関する新たな知見を提供し、観光研究やマーケティング理論の発展に寄与した点が挙げられる。特に、健康意識や健康状態に基づく市場セグメンテーションの重要性を強調し、知覚価値と知覚リスクの多次的影響を包括的に分析した点が評価される。また、実務的には、ウェルネス・ツーリズム市場における戦略的資源配分やサービス設計に対する具体的な提言を行い、観光客の満足度とロイヤリティを高めるためのマーケティング戦略を提示している。

審査会では、研究モデルやデータの信頼性と妥当性、ウェルネス・ツーリズムの定義や研究結果の一般化可能性について多岐にわたる質疑が行われた。具体的には、「参加回数を統制変数としてモデルに組み込まない理由」について、サンプルサイズやデータ収集の困難さが挙げられた。また、「温泉観光への偏りが分析結果の一般化可能性に与える影響」についても指摘があったが、これに対し、李氏はデータの収集方法や対象地域の選定が持つ特性を説明し、温泉観光が含まれる地域における結果の適用可能性を明確にした。また、「研究モデルが潜在顧客ではなく既存顧客を対象としている理由」についても議論があり、これに対して、李氏は過去の体験が観光行動に与える影響を明確化するため、再参加意図を従属変数としたモデル設計を試みており、それゆえ今回の研究では新規顧客誘致のための示唆は考慮していないと回答した。また、質疑応答の中では、「ウェルネス・ツーリズムの定義における他の観光形態との違い」についても議論が深まり、李氏は、医療観光が特定の治療目的に焦点を当てるのに対し、ウェルネス・ツーリズムが心身の総合的な健康促進を目的とする点を強調した。このような質問に対する李氏の的確な回答は、研究の信頼性と妥当性をさらに裏付けるものとなった。

これらのやり取りを通じて、本研究が持つ学術的意義と実務的応用可能性が十分に示され、審査委員会一同はその高い水準を改めて確認した。また、質疑応答の過程で執筆者が示した論理的思考力と深い学問的洞察は、博士号（観光学）取得に相応しい高い資質を示すものであると評価し、その結果をここに報告するものであります。